

えぬびい! Oh!

2013 夏
Vol.54



▶2P

第12回よこせと海辺のにぎわい市
～地域から始まる連携の広がり～

▶3P

とさつ子駅弁開発プロジェクト
～新しい食育のカタチ～

▶4～5P

NPO 法人しあわせみかん山の挑戦
～世界一、「おいしい、しあわせ。」な、食の地域を育てたい。～

▶6P

企業と市民活動のパートナーズシップ オピニオンズ高知

▶7P

高知読み書きサービス赤十字奉仕団
～サポートセンター会議室利用団体を紹介しよう!～



浦戸湾に浮かぶ玉島、衣ヶ島を眼前に、観光漁港として整備された高知市横浜の灘漁港からは、湾内の美しい風景を眺めることができる。

5月12日(日)午前10時、晴天の灘漁港に、30張りを超えるテントが並び、第12回「よこせと海辺のにぎわい市」が開催された。

会場では、当日の朝水揚げされた新鮮な魚や地域の方々の手作りの品々が販売され、5千人を超える(主催者発表)人々が来場した。

始まりは「知ってもらいたい」

灘漁港は、県道に面した漁港の入口付近が高い防潮堤に囲まれており、地元の方にさえ漁港の存在は身近なものではなかった。



▲会場には多くのテントが立ち並び来場者がつめかけた

そこで多くの方々に灘漁港の存在を知ってもらい地域のにぎわいの場の創出や環境美化につながればと、「よこせと・まちづくり市民会議」などが声を掛け、町内会や体育会、漁協、学校、各種団体などが実行委員会を組織した。

今では、地区社会福祉協議会や金融機関、看護協会地区支部や校区交通安全会議、病院、社会福祉法人や地元企業などが協賛、協力する地域を上げての催しになっている。

この催しの特筆すべきところは、地域の組織の連携だけでなく、市内中山間地域や県外からも数々の団体が参加しているということだ。

広がる連携

土佐山地区や鏡地区、行川地区の中山間地域からは、柚子の加工品やこんにゃく、田舎寿司、どぶろく、新鮮な朝どれ野菜などが出品され、徳島県上勝町からもお茶や椎茸など多くの新鮮な山の幸を持って参加していた。

徳島県上勝町の森本さんは、「昨年から参加しています。関係者の仕事のご縁から交流する機会ができました。引き続きお付き合いをお願いします、上勝にも来ていただきたいと思っています」と語ってくれた。

会場では、多くの団体や個人が参加し、様々な商品やサービスが提供されている。特に、中山間地域や県外からの参加者が多く、地域の連携が広がっていることが伺える。



▲中山間地域の行川地区と徳島県上勝町の出店



この市は、地域を越えて人と人が連携し、新鮮な海と山の幸が集い、文字どおり「にぎわい」を生んでいる催しである。

期待される新たなつながり

東日本大震災から、全国的に防災意識が高まり地域コミュニティの重要性が再認識されている。

「よこせと」地区は、津波の影響が心配されるところでもある。この催しをきっかけとして、地域内外がより一層の連携を深め、中山間地域との間に普段から人や物が行き交うことができるようになれば、地域同士でいざと言うときの一時避難の提携もできるかもしれない。新たなつながりが生まれることを期待したい。

(森岡)



▲会場のゴミ拾いを行う横浜中学校生徒会のメンバー

*よこせと
高知市の横浜、瀬戸地区の愛称。
「よこせと・まちづくり市民会議」の前身「横浜瀬戸コミュニティ推進市民会議」で使われはじめた。

とさっ子駅弁開発プロジェクト

～新しい食育のカたち～

「食育」と聞くと、学校や行政の取り組みというイメージがあるが、とさっ子駅弁開発プロジェクトは、トヨタ財団の地域社会プロジェクトの助成を受けて、とさっ子タウン実行委員会と土佐駅弁学会がコラボした民間の食育プログラムだ。

この事業の最大の特徴は、こどもが主役であること。とさっ子タウンに参加する小学4～中学3年生26名(第1期)と25名(第2期)が学会員として参加した。スタッフは、様々な方の協力を得ながらこどもたちの食をベースとした社会活動をバックアップした。

5月に、プロジェクトが1年半の活動を終えて、そのプロセスを全公開した図録を発行したので、この取り組みを検証してみた。

食育と社会を学ぶ仕組み

このプロジェクトには、「こどもたちのために、新たな食育プログラムを開発すること」と「こどもたちが経済活動に参画しながら社会を学ぶ仕組みづくり」の2つの側面がある。

食育プログラムでは、こどもたちが実際に高知県内の生産地に出かけて農・漁業の現場や作り手の思いを「知る」、現場で出会ったものをその場で「食す」、

自らが感じた高知の食材の魅力をお弁当という形にして「表現する」、さらにそのお弁当を駅弁にして実際に「販売・検証する」というストーリーを設けている。

また、社会を学ぶ仕組みでは、「原価計



指令書を持って日曜市で高知の食材を購入

算を行い、販売価格を設定する」「開発する駅弁を試作段階でとさっ子タウンに参加する300人の小・中学生やファンドレイングジャパンinここのちの参加者を対象にモニター調査を行う」「完成した駅弁をこどもたち自身がJR高知駅や列車の中で春・冬休み期間に実際に販売する」というカリキュラムを組み込み、経済活動の体験を通じて社会を学ぶ機会となっている。



列車内で実際に販売

進化するプロジェクト

参加したこどもたちや保護者からは、「スーパードに行く」と、魚売り場へ直行するようになった」「レストランでは、原価を気にするようになった」「外食ではファストフードを避けるようになった」「身の回りのことに関心をもつようになった」等、この事業の効果が寄せられ、この事業による学びと自らの生活を結びつけて考えられるようになったこどもたちの姿が垣間見られる。

プロジェクトリーダーの畠中智子さんは、「このプロセスを道の駅等で地域の活性化に活用してもらいたい。次はこどもが野菜をつくるなどのリアルな現場に繋がりたい」と語ってくれた。

このプロジェクトの進化が楽しみな。

(森岡)



▲土佐伝統食研究会の松崎淳子先生から調理方法を学ぶ



▲出来上がった図録

*土佐駅弁学会

高知の物産・観光・おもてなしを基調に、駅弁を食べたくて高知に来なくなる、高知でしか食べられない、そんな高知を代表する駅弁を開発するために、様々なことにトライしようと集まったメンバーで結成された勝ち手の組織。メンバーは尾崎高知県知事をはじめ、多種多様な職種のメンバー。

*とさっ子タウン

小学4年生から中学3年生を対象に、2009年から実行委員会が実施する仮想のまちの事業。こどもたちが、まちで働き、学び、社会参画を行うことで、異年齢間のコミュニケーションの場となり、地域の誇りを育み、社会の仕組みを学ぶことができる。

NPO法人しあわせみかん山の挑戦

～世界一、「おいしい、しあわせ。」な、食の地域をそだてたい。～

夏真っ盛りですが、まだ青いみかんのお話です。みかんは、実は年に30回以上の農薬を使わなければ病害虫を防げないと言われるほど、栽培が難しい柑橘です。そのみかんを、無農薬・無肥料による自然栽培で育てているのが、香南市にあるNPO法人しあわせみかん山（代表 海島未来）。枯れかけた2000本のみかんの木を引き継ぎ、地域の人々を巻き込みながら、環境に優しく美味しいみかんを作り、消費者である我々にも「ほんとうに価値のある美味しいものを選ぶ幸せ」について語りかけています。

代表、海島は言います。「未来につながる農業で食べていきたい！という生産者と、美味しく安心な食べ物が欲しい！という消費者が手をつないで、新しい生産・流通地域を育てたいのです。」

○枯れかけたみかん山

NPO法人しあわせみかん山（以下、しあわせみかん山）は、2011年、担い手のない香南市にあるみかん山を引き継いでスタートしました。今全国に広がる後継者不足問題の根っから取り組もうと、まずは環境に優しく、美味しく安心なみかん栽培を成功させたいと決意し、黄色く枯れかけた葉っぱをつけた木を前に、様々な試行錯誤が始まりました。

転機は、栽培法を有機栽培から自然栽培に一本化し、地元農家や法人団体代表者達と「高知自然栽培研究会」を発足させた事で訪れました。研究会のメンバーで県外へ何度も学びに足を伸ばし、2013年1月27日には「奇跡のりんご」で有名な木村秋則さんをしあわ

せみかん山に招いて剪定の技術と考え方を学び、みかん栽培の知恵と技術を確認させました。



自然栽培とは、「奇跡のりんご」で有名な、世界で初めてリンゴの無農薬栽培に成功した農家・木村秋則さんが全国で指導している栽培方法で、農薬・除草剤・肥料を一切使わず、土や作物がもつ本来の力を最大限に活かす技術と知恵からなる農法。雑草が土を豊かにすることに着目し、有機栽培で使われる未熟堆肥も使用しない。自然栽培の田畑では、人が生態系の循環を信じて、自然を活かすように関わることで、山の木々や道端の草花のように元気な作物が育っていくとされる。

○「よそもの わかももの ばかももの」地元農家のおんちゃんらあを巻き込む

そんなしあわせみかん山の活動は、地元のみかん農家さんらの目に留まり、地域の人々を巻き込んでいくことになりました。その過程については、いごっそう農家、ケンさんの場合を見てみましょう。

今、しあわせみかん山の栽培講師を任されている「ケンさん」。温州みかんの減農薬栽培に60年近く取り組んできた生粋の果樹農家さんです。高知の言葉で「いごっそう」のケンさんは、筋がりと通る、気骨のある生き方をされている人。

近所ということもあって、しあわせみかん山の前は通り道。道路から斜面に切り開かれた段々畑を眺め、「樹が真っ黄色に枯れちゃうじゃないか、どこのバカがやりゆうろっ？」と、

思っていたとのこと。



▲作業後は、スタッフ・ボランティアみなでかまどで炊いたごはんを囲みます。

そのみかん山が、「無肥料・無農薬」の自然栽培に挑戦していると知り、木村さんの剪定を目の前でみてから衝撃を受け、「ワシにも勉強させてください」と、みかん山に頭をさげて会員になり、その後栽培指導員に昇格。みかん山を支える大きな存在となりました。しあわせみかん山は、代表達の活動に魅せられた地域の気骨ある年配の会員さん達に支えられ、発展していきます

○消費者に「知ってもらう」ために

枯れかけた山は、少しずつ活気を取り戻し

「目の前にある、この高知県産のみかんが、どうやって育っているか、誰が育てているか、知っていますか? 雄大なミカン畑の中で、の

○変えていくのはひとりひとりの意識
高知工科大学に招かれ、「地域共生概念」として学生たちを前に代表海島が語った言葉
を要約します。



▲ちびっ子・カマド倶楽部



▶キセキの虫取り大会

こんなしあわせみかん山を、サポーター会員となることで、あるいは会計事務所が決算報告書を無料で作成してくれたり、NPO総会の際には地域の人々が会場を手配し懇親会を段取ってくれたり、たくさんのファンが支えています。

また、物部川の川祭りにおいては、ゴミゼロ企画を提案したり、『川物語』を実演し自然を守ることの大切さを楽しく切なく訴えるなど、地域一体となつて清流保全活動に取り組みました。

ました。それと同時に、しあわせみかん山は、広く一般の方を招いて自然栽培ふれあい体験やものづくり教室、ちびっ子カマド倶楽部など様々な普及活動を実施。秋の収穫時のみかん摘みも合わせると、昨年度は1000人以上の方がみかん山を訪れました。

日本各地を旅して回った経験を持つ代表海島。そんな海島が起業の場として選んだのは高知だったと言います。「高知の人間力はす

る、豊かな高知の自然、そんなイメージかも知れませんが、もちろん、農家の方々、甘いみかんを実らせるために毎日働いています。外見良く、糖度が高く、安定した収量を確保しつつ、市場のニーズを満たすために、肥料・農薬を投入し、とてつもない努力をしています。問題は、その中身です。みかんの農薬回数は、高知県農作物栽培慣行基準では、年間34回と基準が設定されているのです。一般の消費者は、この具体的な数を知りません。でも、今日ここにいるあなたがた一人ひとりが、このシステムを支えているから、この生産が成り立っているのです。野菜でもお米でも、実は中身は同じことです。

1年間で何十回も畑にまかれた肥料・農薬は、雨が降ればやがて川に流れます。そして、毎日食べている魚や海藻の生きる海に流れていくのです。これは、遠い国の話ではなく、すぐその畑、すぐその川までつながる、身近な食・環境問題なんです。

この現象は、社会が悪いわけでも、政治が悪いわけでも、企業が悪いわけでも無い、一人ひとりの毎日の積み重ねの結果なんです。けれど、身の回りの地域から「おいしいあんしん」な生産・流通を育むチカラは、ここにいる、みなさんひとりひとりの意識なんです。しあわせみかん山は、世界一の「おいしいあんしん」生産・流通地域をみんなで育むことを目指しています。」

ごい宝。熱い地元愛、損得を考えず手助けする精神、突き進む行動力、新しいものを受け入れる器、外から来た人間だから分かるんです。高知の人はもっとその素晴らしさに気付いてほしい!」そんな代表の高知愛も、人々を惹きつけるのでしょうか。まだまだ、しあわせみかん山の挑戦は続きます。

(あおき)



企業と市民活動のパートナーシップ オピニオンズ高知

■市民活動を熱く応援する企業グループ

オピニオンズ高知とは、ひと言でいうと高知の市民活動（特に文化活動）を応援・支援する企業グループのことだ。高知市本町にある多目的ホール「ラ・ヴィータホール」を活用しながら市民活動を醸成する団体への助成をおこなっている。参画企業は6社。あいおいニッセイ同和損保、入交グループ本社、高知トヨペット、サニーマート、三菱電機、そして宮地電機だ。事務局は宮地電機株式会社内開設、運営を担っている。

■高知の文化の醸成と発信を支援したい！

声を上げたのは宮地電機株式会社代表取締役社長／ラ・ヴィータ株式会社代表取締役社長の宮地貴嗣氏だ。企業は地域と共に成長・発展していく仲間であり、「信頼と協働」で結ばれる力強い関係でありたいと宮地氏。「ここ高知の地でみんなが生活を営み、一生懸命暮らしている。そして、この地域と人がいて成り立っているのが企業である。だからこそ地域に根ざし、地域と共に歩むことを企業倫理の根底に置くべきである」と考える。そして、わたしたちになにができるのか？を考えたとき、得意とする文化貢献を以て、地域発展につながるなにかをしたい！と考えたのが事の始まりである」という。

■全席S席、それがラ・ヴィータホール

ラ・ヴィータホールは小粒なホールだが、コンサートや各種イベントなど、様々なニーズに対応するフレキシブルな空間を持ち、かつ、小規模だけれど大ホールに負けない性能（音響など）も持つのだ。ホールという性格上、どうしてもコンサートや講演、演劇など

文化活動に限定されがちだが、だれもが使いやすい県民市民のための多様性のある空間でありたいとつくったラ・ヴィータホール。オピニオンズ高知の趣旨と活動内容が合致すれば様々な活用をしていただき、かつ、助成金を利用していただきたい。

■助成内容

- ①ラ・ヴィータホールの無料貸与
- ②公演等に係る経費への助成
- ③公演告知の協力

要するに、ホールの無料、さらに経費への助成、広報などを支援してくれるのだ。ただし、経費は無尽蔵にあるのではなく、上記の参画企業からの協賛金内で賄われるので限りはある。

また、年間を通して申請を受けつけているが、1年を3回に区切って提出期日を設け、助成審査をおこなっている。助成を受けたい団体は、下記の連絡先に問うていただきたい。ハ事務局からひとことV

「応募していただきたい対象者は、大都市から有名人を連れてきて公演を開催するものもちろん拒みませんが、文化活動を通じて高知を愛する団体や、地元で活躍する若手（若者）たち、高知出身で現在は他県で活躍する方々をお待ちしております。また、ここ高知の若者たちがここラ・ヴィータホールで研鑽し、大都市に音楽修行に出かけ、その成果をここ高知で披露（発表）してもらおう場として使ってもらえればこの上なくうれしいです。また、高知では聴けない音楽や体験できない文化活動も大歓迎です。（門脇氏談）」とのこと。

■運営スタッフの夢

オピニオンズ高知には、宮地氏に負けず劣らず熱いスタッフたちが関わる。伊藤氏と門脇氏だ。オピニオンズ高知を運営する中でいつも想う「夢」があるそうだ。「高知の若手が、ここラ・ヴィータホールから日本・世界へ羽ばたき、将来、高知に帰ってきて活躍の場を持ち、高知の元気につなげてほしい、これがわたしたちが願うことです」うーむ、頭が下がるばかりである。

■余談

「ホールには多くの感動があります！」と、宮地氏。「好きな曲をネットでダウンロードし、イヤフォンでいつでもどこでも聴くことができる便利な世の中になったが、ホールという生にはかなわないですよ！」と断言。歌手、演奏者たちが、聴きにきてくれた大切な方々のためだけに歌ったり演奏することは、イヤフォンで聴く同じ曲でも大違いなのだそうである。うーむ、これまたうなずきしかなかった。

（しのみや）



▲オピニオンズ高知事務局スタッフ
左から門脇美佳さん、宮地貴嗣さん伊藤清孝さん

【お問合せ先】

〒780-8690 高知市本町 3-3-1（ラ・ヴィータ内）オピニオンズ高知事務局：門脇さんまで
●TEL (088) 871-1111 ●FAX (088) 871-1112 ●E-mail:kadowaki-m@la-vita.co.jp

高知読み書きサービス赤十字奉仕団

～サポートセンター会議室利用団体を紹介しよう!～

高知読み書きサービス赤十字奉仕団（以下奉仕団）は平成11年4月に発足し、現在の団員数は11名。高知市市民活動サポートセンター開設以来、センターの会議室で、読み書きがづらい方のために代読代筆等の奉仕活動をしている団体です。

今から14年前。高知芸術学園園長の笹川耀子さんと副園長の井上清志さんが、代読代筆をしてくれる所を探している、目の不自由な方に巡り合いました。当時二人は声を使っていて皆を励ましたり喜んでもらえる事は何かないかと考えていた時でした。その頃高知には読み書きサービス提供の組織も無く、それが活動を始めるきっかけとなりました。奉仕団の活動は簡易なものから専門的なものまであります。

■対面で話をしながら「書く」

「裁判で使う書類を代筆した時の事。一言一句間違っていないので依頼者の話す言葉を書いては必ず確認するという作業を連続4日も続けた事もある」と思い出深げに語る松田眞佐さん。宛名だけという簡易なものや、年賀状、手紙、各種書類の代筆、また代読も



5月定例会の様子皆さん真剣です

行っています。活動の中でなにより嬉しいのは「またお願いします」と喜んでもらえる事です。

■正しく分かり易く「読む」

県政だよりの「さんSUN高知」と「えぬびいOh!」の録音版も、奉仕団が作成しています。以前は県議会だよりの手掛けていました。

録音担当の四宮隆さんは「広報誌や季刊誌は、できるだけわかり易いように順序を変えてみたりと工夫して読んでいる。ICレコーダーは途中で修正が効かないから1フレーズごとに確認しながら読むと次に進めないんです」と苦労話も聞かせてくれました。



▲毎月発行の高知県広報誌・年3回発行の高知市市民活動サポートセンター季刊誌

■魅力溢れる癒しのテープ

「土佐弁丸出しかまんき音読サービスで絵本とかも読んでや〜」という要望で始めた癒しのテープづくり。高知の昔話、面白いひょうげ話（土佐落語）、小説とジャンルも豊富。

この癒しのテープは希望者に無料で送ってくれます。

■心やすらぐ落ち着いた声で代読

普段は自宅で行う録音を今回特別に会議室で実演してもらいました。活字を目で追って読むのとはまた違う、心にすーっと入り込んでいく心地良い気分が印象に残りました。ぜひ皆さんも録音版を聞いてみませんか。

老眼で見えにくい・手のしびれ・震え等でお困りの方も気軽に利用できます。

（いわさだ）



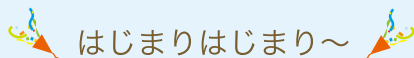
▲「えぬびいOh!」を読み上げる四宮隆さん

高知読み書きサービス赤十字奉仕団は、毎月第2、4木曜日の14時から16時まで、高知市市民活動サポートセンター会議室で対応しています。詳細は会長の井上さん（高知市南はりまや町2-12-22 高知芸術学園内 TEL:088-1883-1806）までお問い合わせ下さい。

夏になり暑くなってきましたね！
スイカ割りや海開き、花火大会など夏はにぎやかなことばかりです。

☆間違い探し☆

～夢中になって暑さを忘れちゃおう！～



はじまりはじまり～
あなたは全部見つけれましたか？

※全部で6つあります。



全部みつけれましたか？
夏にすいかはいいですね♪



#編集スタッフの

つぶやき



@たまき

「岬めぐり」のコードなら弾けるレベルで何十年。しかしこの度ギター始めました♪課題曲はジョン・レノンのジェラスガイです。好きな歌ですが、歌詞がメソメソしているのが気になってしょうがありません。おや私のナイーブさはどこに消えた。



@じゅんさん

最近歳のせいか引き時について考える。何事にも引くときがくる。何年も繰り返していると垢が溜まってくる。たまには水の入れ替えも必要だろう。新しい水を入れて活性化することも大事だ。自分の引き際をいつにするかいつも考える。



@のむ

何かを成し遂げるために何が必要？同じ思いを繋げていくこと。繋げていくためには思いを伝える人、キーマンが必ずいるもの。損得関係なく動ける人も。まちづくり活動しかり。振り返って、自分は？思いはあるのか？思い悩みつつ日々を重ね…。



@おおの

毎回同じだと「マンネリ」なんて言いますが…気の合う仲間が同じタイミングで定番のお店へ（行きたい！）と集まると、家族のような絆を感じます。たまたま隣り合った知らない人でも何かキッカケがあれば友達気分で大爆笑！さすが高知家！！笑



@かめのこ

夏がくる！これまで始められなかったことも、暑さに背を押されて少しだけ積極的になれる季節が到来。あれもやりたい、これもやりたい！やりたいことはメモ帳から溢れるほど…今年も何か思い出になる出来事をいっぱい作れるといいな！

発行

高知市市民活動サポートセンター

企画編集

認定特定非営利活動法人
NPO高知市民会議 広報部会

〒780-0862 高知市鷹匠町2丁目1-43 高知市たかしょう行舎2階
月～金/10:00～21:00 土/10:00～18:00(日・祝日は休み)

TEL: 088-820-1540 FAX: 088-820-1665

E-Mail: npokochi@sminkaigi.com

WEB: <http://www.kochi-saposen.net/>

この冊子は再生紙を使用しています